

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	類義語動詞の語彙的意味の研究：日本語の「習得」に関する動詞を中心に
Author(s)	蘇, 丹
Citation	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究, 1 : 17 - 19
Issue Date	2020-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050551">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050551</a>
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの出版権・著作権は広島大学大学院人間社会科学研究科に帰属する。©2020 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University. All rights reserved.
Relation	



# 類義語動詞の語彙的意味の研究： 日本語の「習得」に関する動詞を中心に

蘇 丹

広島大学大学院総合科学研究科

## A Research of Lexical Semantics for Synonymous Verbs: Based on Verbs of “Acquire”

Dan SU

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

### 論文の要旨

本研究では「習得」に関する動詞を対象として、類義語動詞グループの意味特徴を分析して、語彙的意味の考察を行った。また、本研究での「習得」に関する動詞は、相互的に意味の近い動詞グループ、つまり「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う、修める、習得する、マスターする」という動詞グループを指定した。研究方法として、動詞の語彙的アスペクト、語彙概念構造 (LCS)、動詞の項構造・意味役割、動詞のクオリア構造、日本語・中国語における複合動詞の対照、思考動詞との関連性という6つの側面から、先行研究に基づいて、「習得」に関する動詞の語彙的意味を検討した。

つぎに、第二章から第六章までの本論の内容について詳しく説明する。

第二章では、動詞の語彙的アスペクトについて、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う、修める、習得する、マスターする」という動詞グループを考察した。結論として、本研究の対象は、

動作動詞と変化動詞に分けられる。つまり、動作動詞は「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」であり、変化動詞は「修める、習得する、マスターする」である。そこで、第二章での分析で、この動作動詞と変化動詞という2つの場合に分けて、限界性・意志性・変化プロセスの側面からアスペクトの問題を分析した。

動作動詞の場合に、動作動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は開始限界があるが、必然的終了限界は持たない。しかし、終了限界を持つ場合と、開始と終了限界がともにある時間帯と共起する場合はともに見られるので、開始限界と終了限界の両方を持つことができる。また、動詞の限界性からみれば、このタイプの動詞は工藤(2014)での主体動作動詞に相当して、主体の意志性を示している。

変化動詞の場合に、変化動詞の「修める、習得する、マスターする」においては、主体の動作が先行して、動作の終了限界は主体変化の達成時でもあり、その後が変化の維持になるという動作と変化の2つの部分からなる。主体変化主体動作

動詞に相当して、主体の変化に注目が置かれるが、意志性を表す主体の動作も述べられる。持続性を表すときに、通常は変化達成時以降の変化結果の維持を表すが、動作の様態などに注目する副詞成分と共起すれば、テイル形は変化達成時以前の主体の動作の持続を表す。

第三章では動詞のアスペクトによる分類に従い、「習得」に関する動詞を、Vendler (1967) の4分類の活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と達成動詞の「修める、習得する、マスターする」に分けている。そこで、活動動詞のLCSを[x ACT (ON-y)]で表示して、達成動詞のLCSは[[x ACT ON-y] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]で表示した。達成動詞のLCSではCAUSE (使役) という関数によって、動詞の意味概念である「原因」と「結果」が連結されている。さらに、達成動詞の「修める、習得する、マスターする」は結果焦点の使役と見なされる。この2つのタイプの動詞の項構造はともに〈動作主、対象〉と表記できる。

第四章では動詞のクオリア構造を利用して、第三章の分析結果に基づいて分析を行った。クオリア構造は構成クオリア、形式クオリア、目的クオリア、主体クオリアという4つの性質からなる。クオリア構造は名詞に対応する構造であったが、影山 (2005) と小野 (2005) は動詞のクオリア構造を提案した。本研究は先行研究に基づいて、「習得」に関する動詞のクオリア構造を考察した。活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と達成動詞の「修める、習得する、マスターする」のクオリア構造は第四章で記述した。さらに、達成動詞の場合の主体クオリアと目的クオリアは「原因」と「目的」を指すことを明らかにして、第三章で達成動詞の場合の「原因CAUSE結果」という結論を導き出した。

第五章では中国語の結果複合動詞の場合と、日本語の複合動詞及び達成動詞の場合との関係を考察した。中国語と日本語の「習得」に関する動詞を対照するために、達成動詞の場合に対応する中国語の“学会”“学到”という結果複合動詞を挙

げた。結論として、中国語の“学会”“学到”という結果複合動詞は日本語と同様に、使役状態変化を表し、CAUSEという連結を行う関数を持つことを示した。しかし、そこでは、根本的に異なるところも存在する。すなわち、中国語の場合には、結果複合動詞は統語的複合動詞であるので、CAUSEは統語的レベルにある。しかし、日本語の場合には、達成動詞は語彙的複合動詞と同じように、CAUSEは語彙的レベルにある。従って、中国語と日本語の結果複合動詞は前項動詞と後項動詞の複合するレベルが異なっている。

第六章において、「習得」に関する動詞と思考動詞との関連性を考察した。同じ心理的要素を持つ動詞グループとして、「習得」に関する動詞と思考動詞の異同を動詞アスペクトと主観性と2つの観点から分析した。結果として、この2つの動詞グループは限界性・意志性・持続性のアスペクト的性質が類似することが分かった。しかし、主観性の観点で、思考動詞は主観性を持つが、「習得」に関する動詞は主観性を持たない。さらに、この2つの動詞グループは意味的な側面からみれば、「思考認識的な動き及び変化」を持つ点で共通している。

本研究の意義について、類義語動詞のグループの語彙的意味の分析方法を探った。語彙的アスペクトで動詞の各様態の表す意味を分析した。そして、LCSで動詞の概念的意味を分解し、項構造で動詞と関係づける文の要素を考察し、クオリア構造でLCSと項構造などの構造を使い、動詞の「原因—結果」などの性質を明らかにした。また、本研究で結果複合動詞は、同じ「目的に達成する」という意味を持つ単純語との関係を考察した。本研究で使ったアプローチはすべての類義語動詞グループに適用できるとは言えないが、本研究の分析方法が類義語動詞グループの語彙的意味分析に提案できる。つまり、具体的な動詞グループにおいて構成論的アプローチで分析して、多様な側面から動詞の特徴を把握するのは本研究の意義となる。

今後の研究課題としては、動詞のクオリア構造

をより明確にすること、中国語の場合の動詞の範囲を広げて分析すること、英語の場合も分析することという3つの課題が挙げられる。